

吉本隆明

yoshimoto takaaki

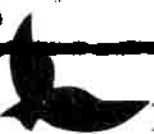
今・森・タカキ論

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



マス・イメージ論

常州大学图书馆
yoshimoto takaki
吉本隆明
藏书章

講談社  文芸文庫

マス・イメージ論ろん

よしもとたかあき

吉本隆明

二〇一三年三月一六日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2・12・21 〒112-8001

電話 編集部(03) 5395・3513

販売部(03) 5395・5817

業務部(03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Sawako Yoshimoto 2013. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



講談社
文芸文庫

ISBN978-4-06-290190-1

目次

変成論	七
停滯論	三七
推理論	五九
世界論	八三
差異論	一〇八
縮合論	一三六
解体論	一六〇

喩法論

一八二

詩語論

二二四

地勢論

二三四

画像論

二六〇

語相論

二八五

単行本あとがき

三一

解説

鹿島 茂

三六

年譜

高橋 忠義

三四

著書目録

高橋 忠義

三二

マス・イメージ論

yoshimoto takaaki
吉本隆明

講談社  文芸文庫

目次

変成論	七
停滯論	三七
推理論	五九
世界論	八三
差異論	一〇八
縮合論	一三六
解体論	一六〇

喩法論

一八二

詩語論

二二四

地勢論

二三四

画像論

二六〇

語相論

二八五

単行本あとがき

三一

解説

鹿島 茂

三六

年譜

高橋忠義

三四

著書目録

高橋忠義

三五

マス・イメージ論

変成論

カフカの『変身』で、いちばん要めは、妹のグレーテが突然心がわりするところだ。

それまで、毒虫に変身した兄グレーゴルを愛しんでいた。毎日食べ物を部屋に運んでやったし、動きやすいように家具を片づけたり、窓から外を眺めるのに椅子をよせてやった。ほんとは妹のグレーテは虫に変わっちゃった兄をみるのが哀しく気味がわるくて耐えがたいおもいなのだ。兄のグレーゴルの方もできるだけ妹に姿をみせまいと気をつかって、麻の敷布をソファのうえにかぶせて、身体をぜんぶもぐり込ませるようかくす。虫に変身した兄と人間である妹とのあいだには、一種の哀しい近親愛が呼吸している。両親が薄気味わるがってグレーゴルの部屋に足を踏みいれないはじめから、妹は虫の動きに潜む兄の人間の心を読むことができている。

虫に変身したグレーゴルの意味は、この世界がどう変成されているかという意味とおなじだ。人間の心や判断や思考をもつのに、虫の身体としてしか行為を表出できないひとつの状態が表象されているのだ。

虫という種は身体として制約し、人間という種は精神を制約する。すると虫と人間の合いの子が産まれるわけではない。グレーゴルのなかで精神としてひろがってゆく人間の身体が、身体としてひろがる虫の精神と出遇っているのだ。そしてこのばあい虫の精神は虫の身体の振舞いとしてしか表出されない。でもあくまでも虫の精神なのだ。たんに人間の精神をもった虫というのなら、その虫の世界は寓喩の世界にしかすぎないだろう。グレーゴルの虫への変身はとうてい寓喩ではない。毒虫グレーゴルというまったく新しい種が誕生して、それぞれの由緒である人間と虫との母斑をつけながら、新しい心身の世界として実現していることになる。わたしたちは毒虫グレーゴルの振舞いに痛ましさを、もどかしさを感じる。だがこの感じは、いつかじぶんが体験したことがあったとか、これからいつかきつと体験するにちがいない如実感をともなっている。これが世界の変成感なのだ。毒虫グレーゴルは虫になつたいまでも、ヴァイオリンの巧みな妹を、来年は音楽学校に行かしてやろうとおもっている。これは人間みたいな心の動きだが、妹の足もとにすがりつき、なにかよい食べ物をくれるよう頼みたい願望は、もう変成された虫の思いなのだ。そして兄の虫の姿をみるのが耐えがたい妹に、麻の敷布をソファにかぶせてじぶんの身体を

すっぱりかくし、妹がかがみこんだとき視えないようにと思いやる。それは人間と虫が滲透したアマルガムのものだ。

働き手グレーゴルが虫になったあとの家族は、それぞれ変容する。父親は銀行の守衛の仕事をつつけ、母親は服飾店の下請けの下着類の縫子の内職をはじめ、娘は売り子になって働くというように。女中には暇をだし、家政婦が朝と夕方やってくるようになる。働きすぎで疲れきった家中の誰もが、虫になったグレーゴルをかまう余裕をなくしてゆく。妹グレーテは兄にあてがう食べ物投げやりになる。虫になったグレーゴルも、家族が疲れや苛立ちから、じぶんを重荷に感じはじめ、いわば虫にたいする視線に変わってゆくのを感じて、ほとんど何も喰べなくなる。家のなかの一部屋を三人の間借人に貸すことで、グレーゴルの部屋は、間借人の余分な家具の置き場になってしまふ。いままでグレーゴルや父親や母親たちのつどう居間には、間借人があつまるようになり、家族は台所の片隅で食事をすることになる。

ちいさな声でいえば、グレーゴルが虫に変身したために、働き手を失った服地のセールスマンの家族には、これだけの変化がおとずれる。つまり世界はこれだけ外観を変えたのだ。ひとつひとつ確かめてみれば、この変化はほんとは、ただグレーゴルが不在になった（遠い旅行、失踪、死など）ときの変化とおなじである。グレーゴルが虫になったための変化ではないことがわかる。ただ家族のグレーゴルにたいする視線が、ほんとの虫にたい

する視線に変わりかけてきたことだけがちがっている。だがこの世界はすこしずつグレーゴルが虫に変身したための、いわば**大変化**にちかづいてゆくのだ。

ある日台所の方から妹のヴァイオリンの音が流れてくる。間借人たちはそれを聴くと、ひかえの間まで立っていった。じぶんたちの部屋へ弾きにくてくれるよう妹グレーテにたのむ。間借人たちの部屋でヴァイオリンを弾きはじめて妹の楽音は、はじめのうち間借人の耳を惹きつけるが、しだいに男たちはだれて、勝手な様子をしはじめる。

そのときグレーゴルは妹が可哀そうになり、「妹のそばまでかまわず進み出て、妹のスカートを引っ張り、ヴァイオリンを持って彼の部屋へ来てくれるように、という気持ちを伝えようと」妹のほうへ這っていく。

間借人たちは驚いて毒虫がやってくるのを父親に指さしておしえる。父親はグレーゴルが這ってきたと知って、三人の間借人たちをかれらの部屋に押しやる。妹は急いでヴァイオリンを弾く手をやめて、母親のヒザに楽器をあずけると、間借人たちのベッドをととのえに隣室へかけ込む。

間借人たちは父親にむりやり部屋に押しもどされたのを憤って、即座に部屋を解約すると宣告する。グレーゴルは間借人たちがじぶんを一匹の毒虫として見つけたとおなじ場所に、じっと動かないでいる。

大変化が世界に起きたのは、このときなのだ。いままで虫に変身した兄グレーゴルを愛

してきた妹は突然変貌する。

「おとうさん、おかあさん」妹が話のいとぐちに、とんと手でテーブルをたたいて言った。「こんな調子ではもうやっていけないわ。おとうさんおかあさんにはわからないかもしれないけれど、わたしにはちゃんとわかっているの。こんなばけものみたいな虫の前で、おにいさんの名を口にするのはいや。だから、こう言うより仕方ないけど、こいつからはなれる算段をしなくちゃいけないことよ。だって、わたしたち、こいつの世話をし、こいつのことを我慢するのに、人間としてできるかぎりのことはして来たわ。だから、今こいつを棄てたって、これっぽっちもわるく言うひとなんかないはずよ。」

「娘の言うことはもつとも千万だ」と父親がひとりごとのように言った。相変わらずまだ十分呼吸ができないでいる母親は、目をあらぬかたに据えたまま、口に手をあてて陰気な咳をしはじめた。

妹は母のところへ急いで行き、額の下に手をあてがった。父親は妹の言葉によって何か考えついたらしく、しゃんとすわり直して、間借人たちの夕食の皿がちらかっているテーブルの上で、彼の守衛の制帽をいじくっていた。そしてときどき、じっと動かないでいるグレーゴルの方を見やった。

「どうしてもこいつからはなれるように考えなくちゃいけないわ」と、妹は今度はもつ

ばら父親に向かつて言った。母親は咳で何もきこえないのだ。「こいつはあなたがたふたりを、きっと殺してしまうわよ。それが目に見えているわ。わたしたちのように、たださえひどい労働をしているものが、家に帰ってまでこんなひどい苦しみを味わって、いつまで耐えていけると思う？ わたしだって、もう辛抱できないわ。」そう言ったかと思うと、彼女はわっと泣き出した。

（カフカ『変身』 高安国世訳）

ここで何が妹グレーテに起こったのだろうか。ヴァイオリンを間借人たちのまえで演奏する行為で流露したエロスをグレーゴルにさまたげられ、突如としてグレーテは兄妹相姦的な愛を冷たい憎悪に変貌させたのだ。

兄の部屋にのこされた一匹の毒虫を、いままで虫に変身した兄、あるいは兄がある朝突然虫に変身したものと見做して愛しんできた。だがいま兄への兄妹相姦的なエロスの息苦しさを断ちきる意志が妹グレーテを支配する。もっと近親でない他者にむかうエロスにめざめる。それにはどうすればいいのだろうか？ 「あいつが（毒虫が―註）グレーゴルだっという考えを棄てさえすればいい」のだ。兄の部屋にいままで住みついていた一匹の虫は、ただの虫で、兄が変身したものであるいは変身した兄とおもわなければいいのだ。

いつのまにか巨大な毒虫に変身しているのに気づいたグレーゴルの自己認知と、虫をグ